

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 富永京子

本論文は、2008年に開催された「北海道洞爺湖 G8 サミット」に対する抗議運動に焦点をあてて、従来の社会運動論の理論枠組みを検討し、現代における運動の特質をどのようにとらえるべきかを論じている。運動組織集団の分析に偏り、また目的意識的な変革運動を重視しがちであった先行研究の理論的視座を、「反グローバリズム運動」という多くの主題を含みうる新しい枠組みのもとでの大規模なイベントとしての性格をもつ「G8 サミット抗議行動」を素材とすることを通じて、新たに注目されつつある経験運動論の視点から再構成し、社会運動のサブカルチャー化ともいべき現象を分析した労作である。

序章の問題の設定に明らかなように、組織の動員の分析だけでなく個人の経験の媒介形態が探られなければならないという立場から、「活動家」が共有し、あるいは反発する社会運動をめぐる「文化」が論じられていく。社会運動を非日常的で反制度的なできごとととらえるのではなく、参加者の受け入れや滞在や食事の便宜、会場の設営、イベントの管理等々の日常的で実務的な領域もまた、現代社会運動の研究では無視できない。筆者は第一章から第三章にかけて、集合行動論、資源動員論、フレーム分析、政治的機会構造論、ライフスタイル運動論、ネットワーク分析などの先行研究を検討しつつ、組織だけでなく個人の経験に焦点をあて、抗議運動として顕在化している局面ばかりではない日常的な経験の分析の重要性を浮かびあがらせている。そうした立場から「社会運動と文化」を論じてきた経験運動論を発展させ、「社会運動サブカルチャー」ともいべきものの作用をとらえるにふさわしい対象事例として、「G8 サミット抗議行動」に参加した運動関係者約 75 名へのインタビュー調査を行っている。第四章での 274 組織のデータを視野にいれた、組織間および個人間のネットワークデータ分析は、インタビュー分析と突き合わせつつ解釈され、第五章でのサミット抗議行動のメディアイベント性の考察へとつながり、運動の「メインステージ」と「バックステージ」の双方の管理をめぐる活動家たちの意味づけに分析の焦点が絞られていく。続く第六章では、サミット抗議運動に関与した活動家たちの、さらに広い社会運動との関わりに視野を拡げ、運動への参加のありかたを規定している運動の「文化」ともいべき理念や常識や人間関係のマナーなどを分析し、第七章では、そうした文化から離脱した人びとも含めて、活動家たちの家庭・職場・地域に対する日常的な意識を分析し、運動参加の意味を考察している。終章では、こうした考察をまとめて「日常」「個人」「静態」に注目する意義を論じている。

本論文は、細部の表現にまだ荒削りで性急な部分を残すとはいえ、現代社会運動論の研究蓄積に学びつつ、G8 サミット抗議運動という複合的な性格をもつイベントを素材とすることで初めて達成できた社会学の意欲的な研究である。本審査委員会は、博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。